1　戦争はどうして起こるのか　　(2014 . 9)
2　平和とは何か　　(2014 . 10)
3　神の平和宣言　　(2014 . 11)
4　クリスマスに願う平和　　(2014 . 12)
5　人の命の尊厳について　　(2015 . 1)
6　復讐は神に委ねて　　(2015 . 2)
7　可哀想に思ったから　　(2015 . 3)
8　十字架と復活の指し示すもの　　(2015 . 4)
9　聖書と反知性主義　　(2015 . 5)
10　責任のある言葉を　　(2015 . 6)
11　羊飼いの務め　　(2015 . 7)
12　戦後70年の悔い改め　　(2015 . 9)
13　高ぶる者は低められる　　(2015 . 10)
14　寄留者を愛する　　(2015 . 12）
15　国家の務め・教会の務め　　(2016 . 3）
16　ジュ–ナリズムと預言　　(2016 . 5）
17　良心のゆくえ　　(2016 . 7）
18　神の業を映す人　　(2016 . 9)
19　クリスマスの衝撃　　(2017 . 1)
20　映画「沈黙-Silence-」に見るもの　　(2017 . 4)
21　互いに蔑みを捨てて　　(2017 . 6)

1　戦争はどうして起こるのか

西神教会（糀台）　牧師　牧野信成

ある教会で講演をした折に、初めての来会者から質問がありました。「話を聞けば聖書の教えは素晴らしいと思う。それなのに何故、世の中から戦争が無くならないのか。そもそも宗教が戦争の原因になっているではないか」。確かに、歴史を振り返れば、聖書を重んじているはずの一神教では戦争は付きもので、キリスト教と言えどもその誹りは免れ得ません。しかし、宗教が異なれば戦争はなかったかといえば、日本の国も古くから戦争を繰り返して来ましたし、宗教が無ければ戦争が止むかといえば、私はむしろ反対の方向へ世界は進んでいるように見えます。聖書は人に「殺すな、姦淫するな、盗むな、偽証するな」と教えます。もしも、それを神からの至上命令として人が本当に重んずることができるならば争いは止むはずです。けれども、この単純な掟を守ることができないところに、人間が戦争を引き起こす原因があります。聖書はそれを「罪」と言います。

聖書によれば、神が創造された世界は善い世界であり、人間も無垢な存在でした。しかし、人が神の定めた掟に聞かなくなり、自分の思いで物事を判断するようになったとき、人の内に悪が生じます。「彼らは神を認めようとしなかったので、神は彼らを無価値な思いに渡され、そのため、彼らはしてはならないことをするようになりました。あらゆる不義、悪、むさぼり、悪意に満ち、ねたみ、殺意、不和、欺き、邪念にあふれ、陰口を言い、人をそしり、神を憎み、人を侮り、高慢であり、大言を吐き、悪事をたくらみ、親に逆らい、無知、不誠実、無情、無慈悲です。彼らは、このようなことを行う者が死に値するという神の定めを知っていながら、自分でそれを行うだけではなく、他人の同じ行為をも是認しています」（ローマの信徒への手紙1章 28-32節）。戦争の原因は人間自身にあり、神の掟に耳を傾けようとしない、自己中心の罪にある。とすれば、私たちの世界が流血を止め、平和な世界を目指して進むためには、まず人間そのものの変革が試みられなければならないことになります。戦争の原因を探るに当たっては、それを何か他人事のように考えるのではなくして、まず、自分自身の心と生活の中にある「罪」に向き合うことがなければ、真の解決の方向は見出されません。（2014 年 9 月）

2　平和とは何か

西神教会（糀台）　牧師　牧野信成

聖書が教える平和とは、単に戦争が無いことではありません。旧約聖書で用いられる「シャローム（平和）」という語が表わすのは、完全であること、完成していることです。今日のイスラエル国ではこれが挨拶の言葉に用いられ、互いの元気を気遣います（アラビア語のサラームも

同じ)。二つの民族や国家の間に争いがあるとき平和が損なわれます。そこで本来の円満な関係(シャローム)が回復されるように人々の祈りがささげられます。詩編34編14節には次のような言葉があります。「悪を避け、善を行い／平和を尋ね求め、追い求めよ」。平和は祈りによって自然に回復されるものではありません。それを願う人には「悪を避け、善を行う」責任がありますから、平和は人が生きる目的だとも言えます。

不正義が見過ごしにされている時代に、預言者エレミヤは「平和がないのに『平和、平和』と言う」世の中の偽りを訴えました(エレミヤ書8章11節)。神が人に求める平和は、一部の人々が満足しているだけの安全で落ち着いた生活ではなく、また、表向きの暮らしやすさとも違っています。「正義が造り出すものが平和」(イザヤ書32章17節)であって、世界が神の作品として完成される(シャローム)まで、私たちはそれを追求して行かねばなりません。祈りは神に聞かれています。平和は神が聖書を通して私たちに見せてくれる未来です。人間の罪深さを思うとき、私たちはその現実に心を奪われてしまうのですが、それで聖書にある希望が無価値なものになってしまうことはありません。むしろ、その現実の深い淵を私たちと同じように経験した人々が、そこで聞いた神の言葉・キリストの救いを聖書に記しました。神は志を与えられた人々と共に、真の完成(シャローム)を目指してこの世界を導いてゆかれます。「平和を実現する人々は、幸いである、その人たちは神の子と呼ばれる」(マタイによる福音書5章9節)
(2014 年 10 月)

3　神の平和宣言

西神教会(糀台)　　牧師　牧野信成

私が所属する教会の西部地区での集まりでは、毎年8月15日に平和のための祈念集会を行います。教会の内外から講師を招いて今日的な課題について共に考え、心を合わせて真の平和のために祈る機会となっています。

今年は戦争の愚かさを忘れないでいるために、戦時中の体験談を聞く「証言」のプログラムも加わりました。その集会への案内を記したポスターに、いつも記載される次のような聖書の言葉があります。「わたしは神が宣言なさるのを聞きます。主は平和を宣言されます。御自分の民に、主の慈しみに生きる人々に、彼らが愚かなふるまいに戻らないように」(詩編85編9節)。不正義を許し国民を戦争へと駆り立てた指導者たちの

過ちによって、旧約のイスラエルは手酷い敗戦と国土を失う経験をしました。その反省の中から生まれた詩編には「愚かなふるまい」を悔いる心が率直に表明されます。そして、そこへと再び戻らないことが平和への願いとして神に祈られます。

聖書が描くイスラエルの歴史から学ぶ一つのことは、人間はたびたび忘れるということ、そして、忘れた頃にまた戦争の惨禍がやってくることです。そうした「愚かさ」を見つめながら、この世の災いごとを神の怒りと受け止め、赦しを希いながら平和を待ち望んだのが聖書の信仰者たちでした。

人間の愚かさだけを見つめるのであれば、そこに希望は生じるはずもありませんが、聖書は同時に平和を宣言なさる神の声を世界に伝えます。先の詩編には次のような続きがあります。「慈しみとまことは出会い、正義と平和は口づけし、まことは地から萌えいで、正義は天から注がれます」（11、12節）。人間の誇りをかけて力比べをしても解決のできない問題に、聖書は天からの声を与えて、私たちがあきらめないで真実と正義によって歩むよう励ましを送っています。聖書の「正義」とは、隣人の弱さを担う責任が果たされることを意味します。
（2014 年 11 月）

4　クリスマスに願う平和

西神教会（糀台）　牧師　牧野信成

12月に入るといよいよクリスマスのシーズンです。今年は11月30日から待降節（アドベント）に入り、救い主の降誕を待ち望む思いの中でクリスマス当日へと向かいます。ジョン・レノンもクリスマスの歌に平和の願いを込めたように、この日には世界中の人々の思いが一つに集められて神に向かいます。クリスマスは闇に包まれた世界がキリストによって希望の光に照らされた日を記念する祝祭です。

降誕劇の舞台となったのはユダヤのベツレヘムでした。救い主が誕生したとのメッセージを最初に天使から受け取ったのは、野原で夜通し羊の番をしていた羊飼いであったと福音書が記しています（ルカによる福音書2章）。天からの光に照らし出されて、彼らは喜びの使信を告げられ、天使たちによる荘厳な歌声を耳にします。「いと高きところには栄光、神にあれ、地には平和、御心に適う人にあれ」（2章14節）。キリストの到来は、地上に平和をもたらそうとの神の意志の表れです。神の「御心に適う人」たちが、キリストと共に平和に向けて歩み始めます。

クリスマスに歌われる賛美歌には美しい旋律のものが幾つもあります。近年よく耳にするようになったものの一つに「Let There Be Peace on Earth」という1955年に米国で作られた歌があります。1971年に公にされて以来、今や世界中で翻訳されて歌われるようになりましたが、日本では「地には平和」との題で紹介されています。歌詞を翻訳すれば次の通りです。

地に平和があるように　それを私から始めよう
地に平和があるように 「平和」が意味する通りに
神、私たちの造り主と共に　私たちはみなその子どもたち
互いに寄り添って歩もう　完全なハーモニーをもって
平和を私から始めよう　今をその時としよう
私の歩む一歩一歩で　これを厳粛な誓いとしよう
「どの瞬間も平和を生きよう、永遠に」
地に平和があるように　それを私から始めよう

天使から平和の知らせを聞いた羊飼いたちは、間髪おかず救い主のもとに馳せ参じました。平和のための行動は、いつも今がその時、まずは私からです。心から平和を願う一人一人の心に、クリスマスを通して、神が慰めと勇気とを与えてくださいますように。（2014 年 12 月）

5　人の命の尊厳について

西神教会（糀台）　牧師　牧野信成

新年明けましておめでとうございます。こうして新しい年を迎えることのできた私たちに、神の平和が訪れるように祈りつつ今年も歩んでまいります。

聖書は生まれてくる一つ一つの命がかけがえのないものだと教えています。すべての命が尊ばれて平和な世界が実現することがあらゆる宗教の目標なのではないかと思います。ではなぜ、人間の命には特別な尊厳が与えられているのでしょうか。聖書の初めにある『創世記』には次のように書かれています。

あなたたちの命である血が流された場合、わたしは賠償を要求する。いかなる獣からも要求する。人間どうしの血については、人間から人間の命を賠償として要求する。人の血を流す者は人によって自分の血を流される。人は神にかたどって造られたからだ。（9章5・6節）

人の命が損なわれて無辜の血が流された場合、神がその賠償を要求する、と言われます。「目には目を、歯に歯を」で知られる古代のタリオ法は旧約聖書でも認められて、「命には命を」との原則が導かれます。そして、その根拠が「人は神にかたどって造られた」ことに置かれます。では、すべての人間が保有する「神のかたち」とは何かという解釈の問題は今日に至るまで様々に論じられていますが、その意味するところは、人間には神の至高の尊厳が映し出されていて、それを踏みにじる者は神の尊厳を傷つけることになるのです。「いかなる獣からも命の賠償を要求する」とは他に例を見ない厳しさです。モーセの十戒にも「殺してはならない」との掟が、いささかの条件も付されずに簡潔に与えられているように、聖書から導かれる倫理においては人間の生命は最高度に尊ばれます。

また、「命（ネフェシュ）」とは人間の中心を指すと同時に全体をも表します。人間の命とは、ただ息があるというだけでなく、その人の存在そのもの、生活の営み全体をも含み込んでいます。「殺してはならない」とは、「殺さなければいい」のではなく、「殺されてならない」命を大切にするようにと積極的に命じられているところの教えです。人間には命をどうにでもすることのできる自由が与えられているかも知れません。ですが、命は神のものであって、たとえそれが他人の命であっても自分の命であっても、「自分のものだ」と主張することは、神に対して強奪を働くことになります。

人の命の軽重が民族や家系や能力によって量られる今のような時代に、尊厳の失われた人間社会の重い病を見るような気がします。命は人間関係の不和や自然災害によっても簡単に傷ついてしまいます。けれども、神が尊んでおられる命が人によってそのようなものとして尊ばれるときに、たとえどのような境遇であったとしても、人は尊いものとして生き、また死ぬことができます。誰もが尊い命を生きていることに心から共感できる人が、新しい日本の未来像を描いてくれることを期待します。（2015 年 1 月）

6　復讐は神に委ねて

西神教会（糀台）　牧師　牧野信成

スポーツなどで「雪辱を果たす」ことを英語では「リベンジ」と言いますが、今日はここそこでこの「リベンジ」という言葉が聞かれます。復讐を意味するその言葉が巷で流行り、小説や映画の人気テーマとなるのも時代の空気なのかも知れません。いや、昔からそうなのかも知れませんが。

誰かに損害を与えてしまう失敗を犯した時、その場で素直に謝れば大抵は許してもらえるはずです。けれども、当たり前の人間関係が壊れてしまっ

ている世の中で、子どもたちは人に頭を下げることも教わっておらず、相手の謝罪によって自分の傷が癒されることも経験しないまま、残酷な復讐が正当化される社会に放り出されてしまいます。決して癒えることのない傷もあるのだと思います。不慮の出来事によって親や子どもを失った家族の痛みは同じような経験をした人にしかわかりません。それが戦争など人の手がもたらした被害であれば、誰であっても恨みが募るものと思います。

聖書は愛の言葉とも言われますが、復讐／報復は一つの重要な主題です。旧約聖書を開けば至るところで「敵への報復」が語られます。例えば『創世記』では人間が文明世界を切り開いて発展してゆく中で、罪の悲惨もまた拡大してゆく様子が描かれます。弟のアベルを嫉妬から殺害したカインは、自分の犯した罪の大きさに打ちのめされて血の報復に怯えます。神はそこでカインに対する報復をさせないとの御旨を明かしますが、そこから世代が下って文明の祖となるレメクに至ると際限のない報復が彼の口から語られるようになります（『創世記』4章23・24節）

聖書では、大切な家族を大国の驕りと暴力で奪われた、力のない人々の嘆きが神に向かいます。「報復してください」との切実な祈りが、復讐を求めずにはおれない世界の人々の痛みを汲み上げます（詩編94編1節以下）。神はそのような人間の苦しみをご存知でありながら、しかし、人間の掟においてはこう語ります。

復讐してはならない。民の人々に恨みを抱いてはならない。自分自身を愛するように隣人を愛しなさい。

誰かの不正や冷酷さに傷つけられた痛みから生じた復讐心を、どのように取り去ることができるのか、簡単な答えは見つかりそうにありません。しかし、十字架に御子を送った神はその痛みを分かっておられ、悪に対する報復つまり裁きは必ず神ご自身が果たされることを聖書は告げています。新約聖書でも使徒パウロの口を通して「自分で復讐せず、神の怒りに任せなさい」と言われます。痛みが和らぐにも時間がかかります。そこで耐えねばならない人にさらに恨みを負わせてしまわないように、傷が癒えるまでの時間を一緒に過ごしてくれる周囲の支援が大切なように思います。（2015 年 2 月）

7　可哀想に思ったから

西神教会（糀台）　牧師　牧野信成

ある人がエルサレムからエリコへ下って行く途中、追いはぎに襲われた。追いはぎはその人の服をはぎ取り、殴りつけ、半殺しにしたまま立ち去った。ある祭司がたまたまその道を下って来たが、その人を見ると、道の向こう側を通って行った。同じように、レビ人もその場所にやっ

て来たが、その人を見ると、道の向こう側を通って行った。ところが、旅をしていたあるサマリア人は、そばに来ると、その人を見て憐れに思い、近寄って傷に油とぶどう酒を注ぎ、包帯をして、自分のろばに乗せ、宿屋に連れて行って介抱した。そして、翌日になると、デナリオン銀貨二枚を取り出し、宿屋の主人に渡して言った。『この人を介抱してください。費用がもっとかかったら、帰りがけに払います。』さて、あなたはこの三人の中で、だれが追いはぎに襲われた人の隣人になったと思うか。」律法の専門家は言った。「その人を助けた人です。」そこで、イエスは言われた。「行って、あなたも同じようにしなさい。」（ルカによる福音書10章30?37節）

これは新約聖書にあるイエスのたとえ話の中でも最も有名なものの一つ「善いサマリア人のたとえ」です。イエスは人々に愛の尊さを説きました。それに対してユダヤ人の教師は、では誰を愛するべきか、と問いました。そこでイエスは「万人を」と、博愛を安直に唱えるのではなく、たとえ話によって問うた者が自分で考えるように導かれます。

あるユダヤの商人が強盗に襲われて瀕死の重傷を負い、道に倒れています。その道の傍を「祭司やレビ人」という聖職者たちが知らぬ顔で通り過ぎて行きます。辛辣な社会批判がここに込められているのが分かります。世の中の指導者たちは口では立派なことを語ってはいますが、本当はみな自分のことで手一杯であって他人のことなどにかまけておれないでいます。「祭司やレビ人」にとって大切なことは、自分の仕事や立場を守ることで、余計なことには巻き込まれないように日々気を配って過ごすことです。

そこへ登場する「サマリア人」とは、同じユダヤに住んでいながらもユダヤ人とは敵対関係にあった民族です。同胞に見捨てられて死ぬばかりであった商人は、自分が嫌っていたはずのサマリア人に命を救われました。このサマリア人が彼を助けたのは、宗教的・政治的・思想的な動機が働いたためではありません。「その人を見て憐れに思った」からです。「憐れに思う」とは、原文の言葉では「腸がちぎれる思いがする」ことを表します。身が引き裂かれるような同情心によって、サマリア人は民族差別の壁を越えて、できる限りの手を尽くして怪我人に寄り添いました。

イエスが説いているのは、天の神が人を見やる時のその見方です。それが同時に、私たちが他者に接する時の基本的な姿勢として差し出されてもいるわけです。自分のために隣人を選ぶ囲いを取り去って、自分の持てる力で、低められ傷つけられた人に心からの同情を寄せて、自分がその人の隣人になるところに愛の道が開かれます。（2015 年 3 月）

8　十字架と復活の指し示すもの

西神教会（糀台）　牧師　牧野信成

わたしは、キリストとその復活の力とを知り、その苦しみにあずかって、その死の姿にあやかりながら、何とかして死者の中からの復活に達したいのです。（フィリピの信徒への手紙3章10-11節）

四月はイースターの季節です。旧暦に従っていますから日付は毎年変わりますが、その日には十字架で死んだイエス・キリストの復活が教会で祝われます。今年は4月5日がその日です。枯れた大地に緑がよみがえって花が咲く、復活の季節はまさに命に満ちています。

キリストの復活は、その十字架の死と裏表の関係にあります。イエスの十字架に表されるのは、罪なき者を死に追いやるこの世界の悲惨です。そこで人は徹底的に蔑まれ、虐待され、さらしものにされて、排除されます。人間はそこで加害者であると同時に被害者です。聖書が神の名によって告発する人間の罪は、この閉塞した悲惨な状況の中で訴えられます。

その意味で、人の命が尊ばれないこの世界には今も十字架のしるしが満ちています。そして、それに気がつかない振りをして過ごすばかりか、すべてを過去へ押しやってあたかも無かったことのように記憶から抹消することで、また新たな十字架づくりに励んでいるのが私たちの世界の救い難い罪深さです。しかし、人がどれほど命を蔑んだとしても、神にとっては小さな命の一つ一つが大切です。神は十字架で死んだイエスを復活させて、人間を生かすために力を現わされます。

復活は人間の命に対する神の承認です。自分が生きるためには隣人を殺さねばならない、という論理から抜け出して、自分も隣人も共に生きていくために何ができるかと考えつづけるために、イエス・キリストの十字架と復活に目を注ぐように聖書は私たちを招いています。
（2015 年 4 月）

9　聖書と反知性主義

西神教会（糀台）　牧師　牧野信成

わたしコヘレトはイスラエルの王としてエルサレムにいた。
天の下に起こることをすべて知ろうと熱心に探究し、知恵を尽くして調べた。
神はつらいことを人の子らの務めとなさったものだ。
わたしは太陽の下に起こることをすべて見極めたが、
見よ、どれもみな空しく、風を追うようなことであった。
ゆがみは直らず、欠けていれば、数えられない。
・・・・
わたしの心は知恵と知識を深く見極めたが、熱心に求めて知ったことは、
結局、知恵も知識も狂気であり愚かであるにすぎないということだ。
これも風を追うようなことだと悟った。
知恵が深まれば悩みも深まり、知識が増せば痛みも増す。

（ 旧約聖書『コヘレトの言葉』1章12-18節 ）

内田樹さんが編集された『日本の反知性主義』（晶文社）の売れ行きが好調のようです。合わせて、現代のアメリカ社会を分析したホーフスタッターの古典や森本あんりさんの著作が再評価されて、「反知性主義」が俄かにブームになりつつあります。この言葉が宗教に対するレッテル貼りになりはしないかと些かの懸念もありましたが、上にあげた書物に関しては思い過ごしになりそうで、皆さん慎重に問題を扱っておられてホッとしました。

キリスト教と反知性主義は歴史的に見ても切り離せない関係にあります。近代のプロテスタント教会では米国を中心に、それが「原理主義／根本主義」の問題として扱われてきました。宗教は、超越者の真理が人間の科学的・合理的知性の破れ目から入り込んで信心が生じるところで始まりますから、そこに一見反知性的な側面があることは否めませんが、聖書が人間の理性や知性を敵対視しているように受け取られるのは誤解です。

聖書が語る知恵は、人間が自分を絶対化（偶像化）するのを止めて、神の御前に謙って耳を傾けるところから始まります。そうした知恵のあり方は常に反省的で、真理や正しさを謙虚に求め続けます。旧約聖書にある『コヘレトの言葉』はその一例です。知恵や知識が増せば人は幸せになれるとの素朴な思いから、人が良く生きるための学びを続けることは、神が人間に与えておられる務めです。しかし、知恵の探求には終わりがなく、完全な知識に到達するには世界はあまりに広く、人の一生は短すぎます。人生は風を追うようなもので、死に定められた人の努力は時に空しく挫折し、世の中から忘れ去られてゆくだけです。けれども、そうして自分の限界を見極めたところから真の知性が働きます。聖書が警戒するのは、知性そのものに反対するからではなく、その知性を用いる人間の思い上がりが世界に災いを招きかねないからです。
（2015 年 5 月）

10　責任のある言葉を

西神教会（糀台）　牧師　牧野信成

;

人は友に向かって偽りを言い、滑らかな唇、二心をもって話します。
主よ、すべて滅ぼしてください、滑らかな唇と威張って語る舌を。
彼らは言います。
「舌によって力を振るおう。自分の唇は自分のためだ。わたしたちに主人などはない。」
主は言われます。
「虐げに苦しむ者と、呻いている貧しい者のために
今、わたしは立ち上がり、彼らがあえぎ望む救いを与えよう。」
（ 旧約聖書『詩編』12章3-6節 ）

テレビの国会中継を見ていますと心が荒みます。そこで言葉を発しているのは国を代表する議員たちであるはずけれども、首相でさえも自ら野次を飛ばして議場を混乱させています。知恵ある言葉で、情理を尽くして語って欲しいと願いますけれども、それ以前に慎みを求めねばならないのも辛いところです。

言葉の退廃は政治に限ったことではなく、メディアによって増幅された形で世界を覆っているように見受けられます。計算と蔑みを腹に宿したあからさまな虚偽が真実をひた隠しにして語られている中で、私たちは言葉への信頼を失い、必要以上に懐疑的にならざるを得ません。同時に自分自身もまた、誰に対してどのように語っているかと、心と言葉と行いの一致について反省させられます。

「舌によって力を振るおう。自分の唇は自分のためだ。わたしたちに主人などはない」と、人間の言葉の暴力性が上の詩で訴えられます。ハラスメントやヘイトスピーチばかりではなく、「偽り、滑らかな唇、二心、威張って語る舌」などのすべてが、暴力となって隣人を虐げます。聖書はそれを神に対する反逆として罪に定め、それらの言葉の暴力で苦しめられた人の側にこそ神は立つ、と語ります。

『箴言』に「親切な言葉は蜜の滴り。魂に甘く、骨を癒す」（16章24節、新共同訳聖書）ともあるように、私たちは自分が用いる言葉によって、友を高めることもでき、元気付けることもできます。演出家の竹内敏治さんによれば、言葉は人間の一器官ですから、それが作用する力をもう少し注意深く意識するなら、知らず識らずの内に暴力に加担するようなことにもならな

いで済むかも知れません。私たちの暮らす社会を呪いの中に落とし込んでしまわないように、責任ある言葉を求めて祈ります。（2015 年 6 月）

11　羊飼いの務め

西神教会（糀台）　牧師　牧野信成

主なる神はこう言われる。災いだ、自分自身を養うイスラエルの牧者たちは。牧者は群れを養うべきではないか。お前たちは乳を飲み、羊毛を身にまとい、肥えた動物を屠るが、群れを養おうとはしない。お前たちは弱いものを強めず、病めるものをいやさず、傷ついたものを包んでやらなかった。また、追われたものを連れ戻さず、失われたものを探し求めず、かえって力ずくで、苛酷に群れを支配した。彼らは飼う者がいないので散らされ、あらゆる野の獣の餌食となり、ちりぢりになった。わたしの群れは、すべての山、すべての高い丘の上で迷う。また、わたしの群れは地の全面に散らされ、だれひとり、探す者もなく、尋ね求める者もない。….それゆえ牧者たちよ、主の言葉を聞け。主なる神はこう言われる。見よ、わたしは牧者たちに立ち向かう。わたしの群れを彼らの手から求め、彼らに群れを飼うことをやめさせる。牧者たちが、自分自身を養うことはもはやできない。わたしが彼らの口から群れを救い出し、彼らの餌食にはさせないからだ。

（ 旧約聖書『エゼキエル書』34章1?10節 ）

ジャーナリストの堤未果さんは、著書『沈みゆく大国アメリカ』（続編あり）を通して米国における医療・保険業界の実態を丁寧に説き起こし、多国籍企業とウォール街が政治にも大きな力を及ぼして、自分の利益のために国内だけでなく海外の民衆からも合法的な収奪を働く仕組みを明らかにしています。日本の政治もそれに追随しようとの姿勢をもはや隠しませんが、政治家個人の資質ばかりがマスコミの問題に上がる傍で、国民の貧困化を積極的に推し進めるシステムについての厳しいチェックはあまり表に出てきません。その収奪の構造の中に自分も組み込まれているのを、触れてほしくはないからでしょうか。

国民を羊に喩えるなら、米国や日本には、もはや羊飼いはいないようです。世界規模で繰り広げられるマネーゲームの中にあっては、国民はもはや羊ですらなく数字に過ぎません。モノに対してどれほど過酷な仕打ちをしたとしても、それを倫理的に責めるものはいません。羊飼いが自分を養うことに専念し、羊が散らされ、獣の餌食にされるがままの時代に対して、神は「わたしは牧者に立ち向かう」と世の指導者たちに語りました。「わたしは彼らに群れを飼うことをやめさせる」。

羊飼いには羊を飼う務めがあります。それは羊の持ち主である主人から託された仕事で、主人にとっては羊飼い以上に羊の群れが大切なはずです。羊飼いはその務めに忠実であるからこそ雇われているのに違いありません。この喩えを国に当てはめるのならば、羊は国民であり、羊飼いは政府です。そして羊の群れの持ち主は、国家でも天皇でもなく、国民自身だとするのが現憲法の思想であり、民主主義の根幹でしょう。聖書の信仰からすれば、世界の国民の真の所有者は、創造主である神だけです。謙遜に羊の命を守ろうとする「よい羊飼い」が、今あらゆる領域で現れるのを待ち望まれているように思います。（2015 年 7 月）

12　戦後70年の悔い改め

西神教会（糀台）　牧師　牧野信成

万軍の主の言葉がわたしに臨んだ。「国の民すべてに言いなさい。また祭司たちにも言いなさい。五月にも、七月にも／あなたたちは断食し、嘆き悲しんできた。こうして七十年にもなるが／果たして、真にわたしのために断食してきたか。あなたたちは食べるにしても飲むにしても、ただあなたたち自身のために食べたり飲んだりしてきただけではないか。…万軍の主はこう言われる。正義と真理に基づいて裁き／互いにいたわり合い、憐れみ深くありやもめ、みなしご／寄留者、貧しい者らを虐げず／互いに災いを心にたくらんではならない。」

（ 旧約聖書『ゼカリヤ書』7章4-6、9-10節 ）

毎年八月は六日・九日の原爆投下記念日や十五日の敗戦記念日など、太平洋戦争の惨禍を想い起こす時となっています。今年は戦後70年を数える節目となり、メディアもこぞって特集を組んで過去の記憶を新たにしました。安全保障関連法案が国会で審議され、反対のデモが全国各地へ拡散する中で、安倍首相による「談話」が発表されて、現時点での日本国の歴史認識が国内外に問われました。

前もって周到に準備されたその文面には、「植民地支配」「侵略」「痛切な反省」「お詫び」という四つのキーワードが盛り込まれていますが、戦後70年の節目に期待されたのは、それら言葉の実質であったのだと思います。10年毎に言ってきたではないか、と形式的な「お詫び」を繰り返し述べたところで、それが日本国の誠意として、同じように戦争の傷を負う世界に通用するとは思えません。

「70年」の節目は、旧約聖書の中でも特別な意味を持っています。イスラエル民族はバビロニアとの戦争に敗れて国を失い、国民の主だった者たちは捕囚となって遠隔地での生活を余儀なくされました。彼らが祖国への帰還を許されて新しい世代が再び国づくりを始めたのが70年後のことです。その節目に預言者は、あなたがたの断食は本物であったか、と問いかけます。「断食」は神に対する悔い改めの行為です。イスラエルの敗戦は、神の掟に背いて指導者たちが私利私欲に走り、国民に偶像崇拝を行わせた罪の結果でした。その先祖が犯した罪を悔い改めるために断食の月が定められ、70年が経過した。しかし、それは本当に心からのものであったのか。「あなたたちは食べるにしても飲むにしても、ただあなたたち自身のために食べたり飲んだりしてきただけではないか」 と神は人々が悔い改める心の実質を問いました。

戦後の日本は戦争の痛みを直接負いながら、平和な国づくりを推し進めて来ました。その心を明文化したものが『日本国憲法』ではなかったでしょうか。戦後の歩みが悔い改めの実質を伴うものであるかどうかは、現憲法をどのように扱うかで、国内外に証明されていくのではないかと思います。（2015 年 9 月）

13　高ぶる者は低められる

西神教会（糀台）　牧師　牧野信成

神に逆らう者の安泰を見て／わたしは驕る者をうらやんだ。死ぬまで彼らは苦しみを知らず／からだも肥えている。だれにもある労苦すら彼らにはない。だれもがかかる病も彼らには触れない。傲慢は首飾りとなり／不法は衣となって彼らを包む。目は脂肪の中から見まわし／心には悪だくみが溢れる。彼らは侮り、災いをもたらそうと定め／高く構え、暴力を振るおうと定める。

（『新共同訳聖書』より、『詩篇』73編3－8節 ）

安保法案が強行可決されて市民が怒りの声を挙げている傍らで、安倍政権は「第二ステージ」などと余裕の構えです。批判的な言説に及び腰な大手メディアからは傾聴に値するニュースもソースも得難い状況にありますが、安保法案に反対の立場をとる月刊誌・週刊誌では読み応えのある特集が続けて出されています（賛成派からは「サヨク雑誌」の一言で片付けられてしまいそうですが）。岩波書店『世界』9月号は特に「買い」でしたけれども、青土社『現代思想』10月臨時増刊号もオススメです。31名の執筆者が各々の立場で安保法案を問う視点を自由に語ってくれています。どれも論文を読む、などと気構えないでも読むことのできる短めのエッセイです。

その中に、精神医学の立場から香山リカさんが「傲慢症候群化する政治」という文章を寄せています。国民をバカにし、学問を見下し、国会をも蔑ろにして、「最高責任者」への絶対帰依を要求する現政権の傲慢さは、英国のデヴィッド・オーエンが分析する「傲慢症候群」に相当する、と言います。権力の座に着いた者が陥りがちなこの病理は、14項目ある診断の内、3つないし4つが相当することで判断される、として、その項目が掲げられます。例えば、①自己陶酔の傾向があり、「この世は基本的に権力をふるって栄達をめざす劇場だ」と思うことがある、③イメージや外見がかなり気になる、⑤自分のことを「国」や「組織」と重ね合わせるようになり、考えも利害も同じだと思ってしまう、などです。自分にも当てはまるところがあるのではないかと心配ですけれども、現政権が悪びれることなく人前に露にする「傲慢」は、香山さんが記すとおり、国家を崩壊に導く「死に至る病」のように思われます。

聖書は罪深い人間の性質の最高度のものとして、この「傲慢」を挙げます。オーエンの14項目の中に、「いずれ私の正しさは歴史か神が判断してくれる、と信じている」というのがありますが、本気でそう信じるのであれば、神は人間の傲慢に対しては容赦しません。「皆互いに謙遜を身に着けなさい。なぜなら、「神は、高慢な者を敵とし、謙遜な者には恵みをお与えになる」からです」(『ペトロの手紙一』5章5節)。「だれでも高ぶる者は低くされ、へりくだる者は高められる」(『マタイによる福音書』23章12節)－こう教えておられる十字架のキリストは、すべての人の優れた模範です。(2015 年 10 月)

14　寄留者を愛する

西神教会(糀台)　牧師　牧野信成

あなたたちの神、主は神々の中の神、主なる者の中の主、偉大にして勇ましく畏るべき神、人を偏り見ず、賄賂を取ることをせず、孤児と寡婦の権利を守り、寄留者を愛して食物と衣服を与えられる。あなたたちは寄留者を愛しなさい。あなたたちもエジプトの国で寄留者であった。

(『新共同訳聖書』より、『申命記』10章17―19節)

戦火の収まらないシリアからの難民が400万人を越え、近隣のトルコやレバノンを始めとして他の西欧諸国も対応に追われています。受け入れに反対する人々が多くありながらも、人道的な見地から積極的に避難場所を用意しようという動きが国際社会にあっては活発です。日本にも400人

以上のシリア人が滞在しているといいます（難民支援協会→https://www.refugee.or.jp/jar/report/2015/09/01-0000.shtml）。ですが、日本で難民認定を得られた人はわずか3人に過ぎず、今に至るまで受け入れの門戸は固く閉ざされたままです。これは政府の姿勢を問う以前に、国民がどれだけこの問題を理解し、同情を寄せることができるかが問われているのだと思います。すでに3万人の難民を国内に受け入れることを発表しているドイツでは、国民の6割近くがこれに賛同を表しています。

聖書では「難民」のことを「寄留者」と呼んでいます。必ずしも避難民ばかりでなく国外から移住してきた人々を含みますが、聖書の民イスラエル自身がかつては寄留者／難民でした。族長ヤコブの一族は大飢饉に見舞われた時、父祖たちに倣ってエジプトに逃れて寄留者となりました。そこで勢力を拡大した彼らは奴隷とされて強制労働に服するようになりますが、神の憐れみによってモーセに導かれて自由を得ました。そうした出自を持ち、難民の苦しみ・痛みを知っているはずのイスラエルに対して、神は寄留者に対して冷酷であってはならず、むしろ同胞のように愛することを求めています。

客人をもてなす美徳は日本にも残っているのではないかと思います。見知らぬ人を家に受け入れることには危険も伴います。けれども、疑心暗鬼を乗り越えて、生きるための逃れ場を求めてやってくる隣人を客人として大らかに迎え入れることができるならば、「お・も・て・な・し」の美徳は顔に張り付いた強張った笑顔を越えた真の美徳として生活を豊かにするのではないでしょうか。キリストは「自分の命を生かそうと努める者は、それを失い、それを失う者は、かえって保つのである」（『ルカによる福音書』17章33節）と言って、御自身がそうであったように神の憐れみに生きることへと私たちを招いています。（2015 年 12 月）

15　国家の務め・教会の務め

西神教会（糀台）　牧師　牧野信成

ダビデの家よ、主はこう言われる。朝ごとに正しい裁きを行え。搾取されている人を／虐げる者の手から救い出せ。わたしが火のような怒りを／発することのないように。お前たちの悪事のゆえにその火は燃え／消す者はいないであろう。

（『新共同訳聖書』より、『エレミヤ書』21章12節）

今、私たちの教会ではカルヴァン研究家として知られる渡辺信夫牧師による『教会が教会であるために』（1992 年、新教新書）という本を皆で学んでいます。「教会が教会である」とはおかしな題と思われるかもしれませんが、これはキリスト教会が名ばかりのものになって本来の教会ではなくなってしまうことがあることを示唆しています。明治期にキリスト教が解禁になって以来、欧米のプロテスタント教会は日本各地に宣教の輪を広げ、社会的文化的に多大な影響を及ぼしました。NHKのドラマで盛んに取り上げられている通り、キリスト教から始まった福祉・教育事業は今では全国に普及して、もはやそうした出自さえ知られないものも多くあります。内村鑑三を始め、賀川豊彦、植村正久など著名な指導者たちも現れ、日本の思想形成にもキリスト教は大きな貢献をして来ました。けれども昭和に至る国家主義への趨勢に流されて、キリスト教会はキリストのみを主とし、唯一の神のみを信じるはずの信仰を曲げて天皇に膝を屈め、兄弟姉妹であるアジア近隣諸国のキリスト者たちを見捨てました。日本のキリスト教は存続していたのですけれども、そのとき教会は教会でなくなってしまったのです。神の言葉を聞いて罪を悔い改めることから信仰は始まりますから、戦後のキリスト教会の出発点はそこにあります。

渡辺先生は、キリスト教会は自分のことだけに心を配っていてはならない、国家についても十分な関心を払ってその役割を知っておかねばならないと呼びかけます。

（教会と同様に）国家もまた法的な組織なのです。したがって国家の一番大切な務めは、軍備をもって外敵から防衛することでも、産業を盛んにすることでも、文化を発展させることでもなく、裁判を公平に行うことです。…裁判を正しく行 うべき者がそれをしないならば、神はこの者を滅ぼしたもうのです。

（同書 70 頁）

沖縄や福島の人々の生きる権利を守らず、大臣の汚職問題を隠蔽しようと計る今の日本社会では法的な基盤が大きく揺らいでいます。20年以上前に書かれたこの本から渡辺先生は「私たちの住む国で裁判が正しく行われていないのではないかと憂います」と訴えておられますが、現在の状況はさらに深刻です。キリスト教会は戦後を歩む自らを省みながら、国家のあり方についても常に神の言葉をもって警鐘を鳴らし続ける務めを負っています。

（2016 年 3 月）

16　　良心のゆくえ

西神教会（糀台）　　牧師　　牧野信成

ダビデの兵は言った。「主があなたに、『わたしはあなたの敵をあなたの手に渡す。思いどおりにするがよい』と約束されたのは、この時のことです。」ダビデは立って行き、サウルの上着の端をひそかに切り取った。しかしダビデは、サウルの上着の端を切ったことを後悔し、兵に言った。「わたしの主君であり、主が油を注がれた方に、わたしが手をかけ、このようなことをするのを、主は決して許されない。彼は主が油を注がれた方なのだ。」ダビデはこう言って兵を説得し、サウルを襲うことを許さなかった。

（『新共同訳聖書』より、『アモス書』5章10、12－13節 ）

国際NGO「国境なき記者団」による「報道の自由度ランキング」によれば、日本の自由度は世界180カ国の内72位とのことです。外部からの指摘に依らずともメディアの自主規制による閉塞感は今では日常のものと感じられます。もはやテレビも新聞も政府を批判する姿勢を極力弱めてしまったため、市民に正確な情報は伝えられず、社会の木鐸たる使命をそこに期待することも出来なくなりました。

反知性的な風潮の中では、何事であれ批判的な主張を避けたいとの心情が働くのでしょうけれども、実に聖書は批判的な言葉に満ちています。人の魂の救いと神の愛について優しく語りかける言葉だけを期待して聖書を開くと、激しい言葉で世の罪を糾弾する預言者やイエスの言葉にぶつかって面食らうことになるでしょう。特に旧約聖書の預言者は為政者の傍にあって国の政策にも口を挟む存在でした。幅広い視野で国内外の情勢を見やりながら、神の権威を帯びて不正を告発する預言者たちは、時に体制側の者たちから命を狙われることもありました。イエスが十字架につけられたのも宗教的特権を甘受する体制にあからさまな批判を投げつけたためでした。

はと　　社会の不正を告発するジャーナリズムが単なる広告産業に貶められてしまう危険性は、聖書における預言者の務めについても同様に論じられています。国の為政者たちにおもねって偽の預言を語って人気を得ていた多くの預言者たちがいました。しかし、批判的な預言者たちは当初は人々から疎まれましたが、時間が経過して振り返った時に、彼らが正しかったことが認められて「神の声」として尊ばれました。

周囲の圧力に対して声を上げるには勇気が要ります。しかし、それを為し得るからこそジャーナリズムには社会を動かす力があります。その力を権力者の道具に譲り渡してしまう時に国は滅び、それを「貧しい者」のために取り戻す時に知恵と真実が実る、とは、私たちが聖書から教えられるところです。（2016 年 5 月）

17　良心のゆくえ

西神教会（糀台）　牧師　牧野信成

ダビデの兵は言った。「主があなたに、『わたしはあなたの敵をあなたの手に渡す。思いどおりにするがよい』と約束されたのは、この時のことです。」ダビデは立って行き、サウルの上着の端をひそかに切り取った。しかしダビデは、サウルの上着の端を切ったことを後悔し、兵に言った。「わたしの主君であり、主が油を注がれた方に、わたしが手をかけ、このようなことをするのを、主は決して許されない。彼は主が油を注がれた方なのだ。」ダビデはこう言って兵を説得し、サウルを襲うことを許さなかった。

（『新共同訳聖書』より、『サムエル記上』24章5―8節）

ダビデは旧約聖書のイスラエルきっての英雄です。元々羊飼いの少年であったところから王の婿にまで出世したシンデレラ・ボーイであり、数々の戦いで勝利を重ねた優秀な戦士でした。ところがサウル王は彼の人気を嫉妬して王座が危ういと考え、ダビデを国民の敵とみなして殺害を計ります。王の忠実な家臣であったダビデは王宮を後にして逃亡生活に入りますが、サウルの執拗な追跡に何度も命を失いかけます。そうこうする内にダビデの元には王の政策に不満を持つ者や無産階級の者たちが集うようになり、荒野のゲリラ集団のような様相を帯びてきます。王はこれを壊滅させるべく自ら三千人の精鋭部隊を荒野に送り込みますが、たまたま用をたすために独りで立ち寄った洞窟に、ダビデ一団が身を隠していました。これを千載一遇の機会と見た兵士たちはサウル王に手をかけようとダビデを促します。しかし、彼はこれを思いとどまり、上着の裾を密かに切り取っただけで、サウルが気づかないまま洞窟を出て行くに任せました。

王に忠誠を誓う兵士の心構えを伝えるこの説話には、その忠誠心の称揚以上に大切なポイントがあります。それはダビデが感じ取った心の痛みです。上の引用文で「後悔して」と訳された部分は原文では「心を打つ」という表現です。「感動した」ということではなくて「良心の呵責を覚えた」ことを意味します。その心の動きから、たとえ今は敵となってしまった王ではあっても、流血の罪は神に背くことになると弁えて、自分の手を下すことは控えて、神の裁きに委ね

るという選択がなされています。結果として、この話の中では、サウルはダビデに対する仕打ちを悔い改め、兵士たちを都に引き上げさせることによって、流血の惨事が回避されています。

最近観たある邦画の中で、警察官が「この国はモラルを捨てて久しい」と呟く場面がありました。人々が宗教心を失い、個人の良心を信じなくなったのは確かに世界の大きな動きのようです。人間が分子生物学のレベルで分析され、複雑な社会のしくみを構成する点としてだけ評価される即物的な世界観・人生観の中で、一人ひとりの考えや言葉や行動を突き動かす良心など最早働く余地もないのでしょうか。それが少しでも価値あるものならば、私たちは自分の内面を暫し見つめる時間を持ちたいところです。聖書は、人間には神が与えた良心がある、と語っています。（2016 年 7 月）

18　神の業を映す人

西神教会（糀台）　牧師　牧野信成

さて、イエスは通りすがりに、生まれつき目の見えない人を見かけられた。弟子たちがイエスに尋ねた。「ラビ、この人が生まれつき目が見えないのは、だれが罪を犯したからですか。本人ですか。それとも、両親ですか。」イエスはお答えになった。「本人が罪を犯したからでも、両親が罪を犯したからでもない。神の業がこの人に現れるためである。

（（『新共同訳聖書』より、『ヨハネによる福音書』9章1ー3節）

リオデジャネイロ・オリンピックの華やかな祭典が終わりました。選手たちが胸にしたメダルは世界の頂点に立った人間の栄光に輝いていて、その誇らしさを分け合う多くの人々が未だ余韻に酔いしれます。今回のオリンピックもまた、肉体と精神を極限にまで鍛え抜いた若者たちの、まさに神業と言える競技に世界中の人々が驚嘆し、心を躍らせました。

人間は誰でも輝くことができる、とのキャッチ・コピーは、自分の将来に不安を覚える青少年に夢を与えるものなのかもしれません。確かに、誰もが人間として平等に持つはずの可能性を最大限に伸ばしてあげようとの愛と善意に基づく大人の努力は、明日の世界に希望を与えます。けれども、オリンピックは競技です。それと同じくこの世の栄光を勝ち取ることが生きる意味だというような人生観が共有されて、子どもたちが徒な競争へと追いやられてしまうことが心配です。

相模原市の障害者福祉施設で起こった残忍な事件は、社会に負担をかける人間には生きる価値がないとする歪んだ人生観を背景としています。人の生きる命を勝手に「有用性」の量りで裁いて処理してしまおうという発想は、かつてナチスがドイツで行った障害者安楽死政策「T4作戦」にも見られました。

イエスの弟子たちは街で見かけた盲人に「罪人」とのレッテルを貼りました。しかし師であるイエスはそれを否定して「神の業が現れるため」に彼は障害を負っているのだと言い、彼の目を癒しました。人間の栄光は、互いに競い合って自分で獲得するものではなく、神が人間に与えておられるものだ、との表示がここにあります。罪人であり、誰かの助けを欠いては生きてはいけない人ほど、神の憐れみを受ける器として相応しいものはありません。この世界で生きる便を考えれば、障害を持った方々は不自由な生活を強いられています。けれども、それが人間の価値を制限するのではなく、神は誰にでも生きる価値のある人生をお与えになる、と弟子たちを諭されたのでした。聖書は、人間ではなく、神をたたえて生きることこそ人間の尊厳と語ります。

まもなく、パラリンピックが続けて行われます。あまり人気がないのだそうですが、障害をもった方々にも生きる喜びが十分にあることを世界がよく知るための素晴らしい機会です。競技は勝ち負けではなく、神がくださった命を、力の限り燃やし尽くすことで、生きることの喜びをすべての人と分かち合うことに目的があるのではないでしょうか。（2016 年 9 月）

19　クリスマスの衝撃

西神教会（糀台）　牧師　牧野信成

イエスは、ヘロデ王の時代にユダヤのベツレヘムでお生まれになった。そのとき、占星術の学者たちが東の方からエルサレムに来て、言った。「ユダヤ人の王としてお生まれになった方は、どこにおられますか。わたしたちは東方でその方の星を見たので、拝みに来たのです。」これを聞いて、ヘロデ王は不安を抱いた。エルサレムの人々も皆、同様であった。

（『新共同訳聖書』より、『マタイによる福音書2章1－3節』）

クリスマス・シーズンの到来は歳末の商戦に拍車をかけ、ツリーやサンタ等で彩られた街はひととき活気を取り戻します。お祭り好きの日本人にはハロウィンもどうやら受け入れられたようですけれども（ちなみに、ハロウィンは別にキリスト教のものではありません）、クリスマスがそれと違うのは物語が伴うことです。

クリスマスの降誕物語は、神が救い主としてイエス・キリストをこの世に誕生させた出来事を伝えます。救いの到来を告げているこのメッセージがあるからこそ、人々はこの時期に様々な美しいメルヘンを寄せてきました。けれども聖書が語るままのクリスマスは、その知らせを聞いた人々の不安を伝えています。

東方の学者たちは「ユダヤ人の王」の誕生をエルサレムの都に伝えました。それは小さな村の誰も知らない馬小屋で、貧しい夫婦によって産まれた飼い葉桶の赤子、という静かなイメージとは正反対です。人として産まれたイエスは貧しい一人の青年として成長します。しかし、その語る言葉と愛の働きは、世界を揺るがすほどの衝撃を与えました。

知らせを聞いた都の人々は、王を始めとして皆が不安を感じます。クリスマスは喜ばしい知らせのはずです。けれども、ある種の人々にとってそれは脅威です。神の救いは、貧困や病苦、抑圧、差別などに苦しめられている、真に救いを求める人々の祈りに対する神の答えとして到来します。それら低いところに押し込められた人々の上に居て既得権に胡座をかき、現状に満足している権力者や富裕層の者たちは、神の介入によって権益基盤を覆されかねません。彼らがクリスマスに不安を感じたのは正しい直感でした。

真のクリスマスは富と権力の独占を目指す世界を脅かします。なぜなら、神による世界の変革が、貧しい力のない赤子から、そして、その赤子を守る小さな家庭から始まったからです。東方の学者たちは新しく生まれた「ユダヤ人の王」のもとを訪れ、最高のささげものをささげて礼拝しました。今年も世界中で祝われるクリスマスには、人々の希望が万民の王キリストに託されて平和の実現が祈られます。（2017 年 1 月）

20　映画「沈黙-Silence-」に見るもの

西神教会（糀台）　牧師　牧野信成

主よ、あなたを呼び求めます。わたしの岩よ、わたしに対して沈黙しないでください。あなたが黙しておられるなら、わたしは墓に下る者とされてしまいます。

（『新共同訳聖書』より、『詩編』28章1節 ）

遠藤周作の小説を映画化したM.スコセッシ監督の『沈黙-Silence-』が上映され、教会でも多くの方々が映画館に足を運びました。長崎を舞台にしたキリシタン迫害から取材した残酷な拷問のシーンが評判になったようですが、「神の沈黙」という重いテーマを扱った遠藤氏の綿密な思索を忠実に映像化しようと努力したところに、この映画の見所があったと言えましょう。

もとより「神の沈黙」は聖書に見出される一つの主題です。神を信じた人々は、戦争や災害によって苦しみのどん底に突き落とされた時、長きに渡る痛みと屈辱に耐えかねて、神に向かって叫びの声を上げました。その救いが見えない状況が、行動してくださるはずの神が行動なさらない「沈黙」と受けとめられます。さらに、このことは、周りにいる神を信じない人々が嘲笑う「お前の神はどこにいる」(『詩編』42編11節、他)との言葉にも表れます。

この主題を深く論じている書物は旧約聖書の『ヨブ記』です。神の目から見て全く咎めのない「義人」であったヨブは、生活の祝福であった家財・家族・健康のすべてを失って、苦悶の中で神を恨みます。そこから始まる議論は、人生の悲惨は罪に対する神罰であるとの友人たちの主張に対するヨブの反論を主とますが、ヨブが最終的に取った態度は、嵐の中からようやく聞こえた神の声に対する、完全な服従でした。つまり、人生の祝福ばかりではなく、生きることの苦しみをも神の御手から受け取ることの承認です。そして、その信仰に対して神は十分な報いを用意されました。

『沈黙』が描くキリシタン迫害の状況下で、村人たちも宣教師たちも拷問によってヨブ以上の過酷な苦しみを経験します。そこに現れた「踏み絵」は信者にヨブ的な選択を迫るものでした。そして神の正しさを信じて殉教していった信者たちは、確かに報いを受けたのです。同時にまた、試練に破れて踏み絵を踏んだ、宣教師たちやキチジローにもまた神の憐れみが注がれています。なぜなら、「神の沈黙」の中で真の命の道を開いたのがイエス・キリストの十字架だからです。躓いても躓いても、許しを得たいがためにまた帰ってくるキチジローの姿に、遠藤さんは信仰の本質を見ていたに違いありません。

また、『沈黙』が雄弁に語るのは、そうした神学的な主題だけでなく、人間を自分の意のままに支配するために、命の尊厳を徹底的に貶めなければおれない、残忍な世界の実情です。この罪に対して神は決して「沈黙」してはおられません。キリストの十字架は許しと共に裁きを語っています。この印を刻まれた世界は、己が罪の深さに震えつつ、ヨブを苦しめたサタンの試みに抵抗すべく呼びかけられています。遠藤さんは17世紀の歴史的状況を踏まえて、西欧の列強と日本との間にある国際政治のせめぎ合いの文脈にこの物語を置いています。国の誇りや利益を優先する秩序の維持が、残虐な人間の獣性を目覚めさせるのならば、問題は政治にあります。『沈黙』の舞台を20世紀に映してみれば、同じ醜悪な姿が戦時中の日本にはありました。映画を見て「こんな世の中にしてはいけない」と心を痛めた人々がきっと多くいたでしょう。いつもそこから、平和を願う私たちの道が始まります。（2017 年 4 月）

21　互いに蔑みを捨てて

西神教会（糀台）　牧師　牧野信成

しかし、わたし[イエス]は言っておく。兄弟に腹を立てる者はだれでも裁きを受ける。兄弟に『ばか』と言う者は、最高法院に引き渡され、『愚か者』と言う者は、火の地獄に投げ込まれる。

（『新共同訳聖書』より、『マタイによる福音書』5章22節 ）

何事も利己心や虚栄心からするのではなく、へりくだって、互いに相手を自分よりも優れた者と考え、めいめい自分のことだけでなく、他人のことにも注意を払いなさい。

（ 同上、『フィリピの信徒への手紙』2章3・4節 ）

この数年、私はテレビも新聞も殆ど見なくなりました。ニュース・ソースとして信頼できなくなったためで、主な情報源はインターネットから得ています。そこから有益な示唆を得て、テレビ番組を視聴したり、新聞記事を読んだりすることはあります。最近は官邸の圧力ばかりが強調されてマスコミの忖度が問題視されていますけれども、元より大抵のメディアはスポンサーに拘束されていますから、今でもそちらからの力が現場に及んでいるのではと推測します。

ニュースの速さではツィッターが一歩先を行っています。多くは二次的な情報提供ですが、中には国会議員やジャーナリストが個人的に新しいニュースを投稿したり、文化人・知識人による論評がまさに今・そこでつぶやかれます。SNSの仕組みでは自動的に自分の好みに合わせ

て情報が集まるようになっていますから、私のところにはヘイト・スピーチに類する罵詈雑言は殆ど流れてきません。

「共謀罪法案」を巡る国会の審議もネットで閲覧することができました。強行採決に至る会議の進め方があまりに酷く、また森友・加計疑獄に対する応答のあまりの拙さに、ツィッターでは多くの論者が怒り言葉に表しています。勿論、私も同じ思いです。学生の頃から日本には民主主義は根付いていないと思っていましたが、それがもはや世界中に知られるところとなりました。

しかし、そこで一つ気がついたのは、論者たちの言葉の質です。憲法や民主主義に対する見解は同意するのですが、首相や与党議員に対する蔑視が、最近は国民全体にまで及んでいます。こんな内閣を支持するのは、そもそも国民が彼らに投票するからである。投票しなかった者たちも、しないことで現与党に組したのだから同罪である。だからこの国は愚か者たちによって破壊されることになるのだ。

いささか自嘲気味でもありますけれども、そのように知識人たちがつぶやくの見ていて、米国で起こっている分断と同じ構図がそこにあるように感じました。民主党支持者は共和党を支持する人々をおそらく見下しています。ドキュメンタリー作家のマイケル・ムーア監督の作品は、私はファンでもありますが、必ずそうした目線を含ませています。「あなたがたはこんなにおバカなんですよ」と笑われて、そうですかと悔い改める人間はおそらくないでしょう。そんな風に自我と自我とがぶつかり合えば、お互い一歩も引けなくなってしまいます。日本でも同じではないでしょうか。

不正を不正と批判することと軽蔑することは全く違います。与党の議員たちはそれを知っていながら事柄を感情問題に切り替えて世論の目を眩まそうとしているように見受けられます。けれども、この状況を見て、日本人の民度の低さを見限って、大衆を軽蔑の目で見下すならば、さらに行き詰まるばかりと思われます。イエス・キリストは「馬鹿と言うな」と教えておられます。パウロはさらに「相手を自分より優れた者と思え」と語ります。そこには信仰の論理があって、神の前に高ぶる者は愚か者とされるからで、造られた者に過ぎない人間同士が互いに蔑み合うのは、 まさに「目くそ鼻くそを笑う」ことになるからです。

一国の首相自らが自分を敬えなどと国民に要求するのは誤りです。その務めが十分に果たされていると国民が認めれば、その務めの故に首相は尊敬されるでしょう。知識を与えられた者の務めも同じです。高みから見下ろすことが知識人の特権ではなく、その知識を有効に用いて如何に隣人の徳を立てるかと心を砕くところにあるのではないでしょうか。マスコミやジャーナリズムは真実を伝えるための受け皿として重要です。その器に盛る言葉に求められているのは、あらゆる侮蔑を取り去った真実な言葉であるはずです。真実は真実そのものが自らを証

明するとは聖書の教えでもあります。影響力のある言葉を語る人々には忍耐強くその務めを果たしていただきたいと願っています。（2017 年 6 月）